

13 吉田松陰訪問の地
 14 後藤松陰の私塾「広業館」跡
 14 2人の松陰(吉田松陰&後藤松陰)の対談の地

中央区北浜4-4-12

▶ 「発丑遊歴日録」の嘉永6年(1853)1月11日には、大坂梶木町の後藤春蔵(松陰)を訪れたことが記載されています。

「十一日(途中省略)。後藤春蔵を梶木町に訪ひ、一見して及ち出で、舟に還る。(以下省略)」

吉田松陰はその後、森田節齋を訪ね、岸和田などを遊歴の後、再び3月18日に大坂へ戻ります。しばらく記録が途絶えています。4月1日と3日、再び後藤松陰を訪ねています。

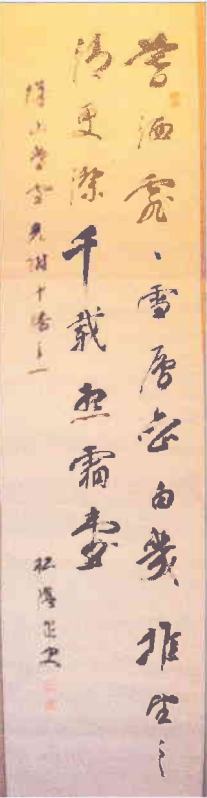
「四月朔日 晴。後藤春蔵・藤澤昌蔵(即ち東咳なり、高松)を訪ふ。二日 晴。坂本鉦之助・奥野彌太郎(遠藤但馬守の臣)を訪ふ。三日 晴。後藤春蔵を訪ふ。(以下省略)」



吉田松陰肖像画

後藤松陰 寛政9年(1797)～元治元年(1864)

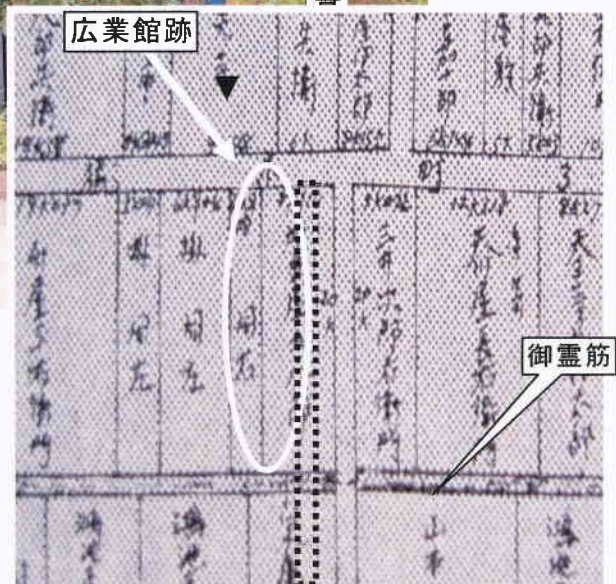
名を機(はた)。字を世張。通称を俊蔵または春草。安八郡森部村に、医師 後藤玄中の二男として生まれます。16歳で菱田毅斎の私塾の塾長を務め、毅斎の勧めにより、頼山陽の門人となります。文政3年(1820)、大坂の永代浜で開塾し、文政8年(1825)、朱子学者である篠崎小竹の娘町子と結婚します。この頃、「詩の広瀬旭荘、文の松陰」と呼ばれ評されていました。塾名は「広業館」といいます。何度か移転し、後藤松陰が6歳のころには梶木町御霊筋西南角(現在の北浜4丁目)で開いていました。吉田松陰が訪れたのはこの地であったと考えられます。



後藤春蔵松陰の書



二人の松陰(後藤松陰と吉田松陰)が対談した跡地



広業館跡

御霊筋

15 淀屋小路跡

中央区北浜4-1(お店の南壁)

- ▶ 淀屋の屋敷跡から御堂筋をやや南に進んだ一角に「mini mini」というお店があります。そのお店の南側に「淀屋小路」についての説明板が掲げられています。昔、ここは「服飾淀屋」というお店で、その店主が壁に大きな説明版を掲げられました。



隣の「尚美堂」というお店では上記のような写真を掲示しています。



史跡淀屋小路の説明板

16 淀屋の屋敷跡

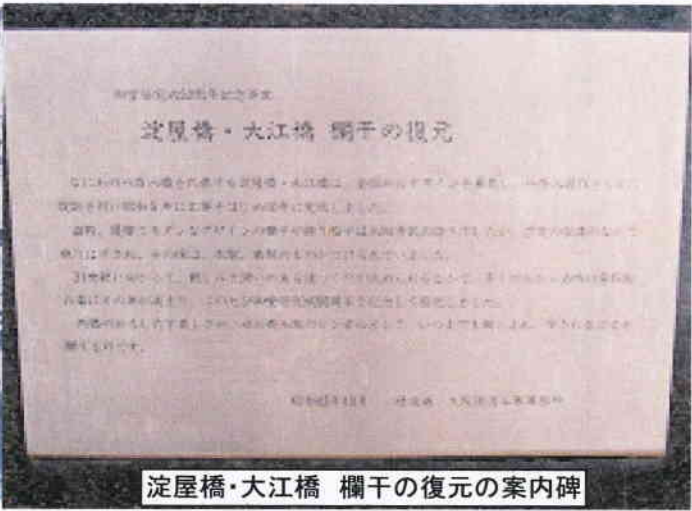
中央区北浜4-1(淀屋橋南詰 西側)

- ▶ 淀屋は江戸期徳川幕府の御用商人として認められ、西国大名の諸藩の年貢米や国産品などの蔵物の保管および販売をつかさどる「蔵元」を務めていました。淀屋の名前は、今でも「淀屋橋」といった橋名や駅名として残っています。店の前で始めた米市が、後に堂島米市場と発展します。土佐堀川に架かる淀屋橋から約1Km西に常安橋という橋があり、淀屋の初代 与三郎常安から命名されているという説があります。隆盛を極めた淀屋も、5代目 三郎右衛門の贅沢が、町人の分限を越えると、幕府から咎められ全財産を没収されてしまいます。「淀鯉出世滝徳(たきのぼり)」という題名で、淀屋5代目の驕奢ぶりから追放までを芝居にしたのが近松門左衛門でした。この時に使われた三郎右衛門の芝居中の名は、淀屋辰五郎といひます。





昭和14年(1939)頃の淀屋橋と淀屋橋交差点



淀屋橋・大江橋 欄干の復元の案内碑

17 林 市 蔵 像

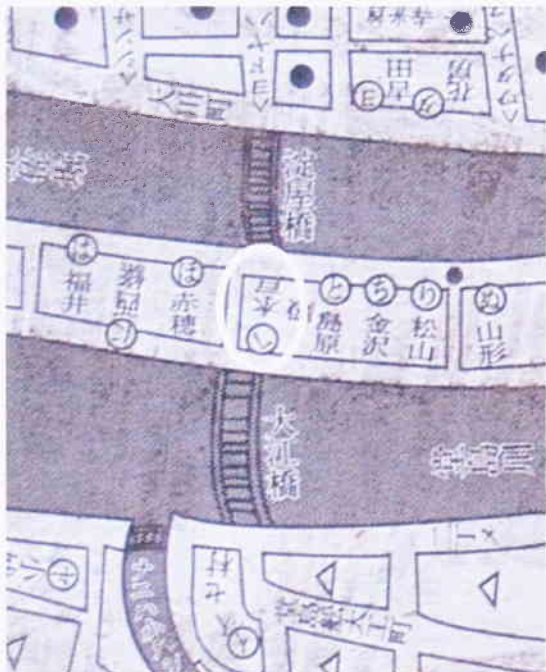
中央区北浜4-1(淀屋橋南詰 西側)

- ▶ 土佐堀通りの淀屋橋南詰西側に大阪府第15代知事の林 市蔵の像があります。
大正期、米騒動などで社会が混乱している時、大正7年(1918)、大阪府知事の林 市蔵は、この近くの理髪店で散髪をしていました。鏡に寂しそうな姿で映っている夕刊売りの母子に気がつき、事情を尋ねました。
脚気で夫を亡くし、そのため生活が非常に困難であるとのことでした。社会福祉対策が不十分だと強く反省した林知事は、行動を起こしました。
今の民生委員制度はこれを受け継いだものになります。



10 水戸藩蔵屋敷跡 北区中之島1(日本銀行大阪支店と大阪市役所の間を走る御堂筋路上)

- ▶ 日本銀行大阪支店の東向かいに大阪市役所があり、その間を御堂筋という8車線もある広い道路が通っています。
古地図によるとからちょうど御堂筋の道路上に水戸藩の蔵屋敷がありました。
水戸藩は、徳川御三家の一つで、徳川家康の11男 頼房から始まり、幕末まで11代の藩主が続きます。その中で、第2代藩主 徳川光圀、第9代藩主 徳川斉昭が有名です。しかし、幕末の水戸藩は、早期より攘夷運動が盛んで、有益な人物が次々と失われ、明治新政府で要職に就いた人物は皆無に近い状態でした。



水戸藩蔵屋敷跡に該当する御堂筋道路